

# 新しい時代における 公務員技術者の使命

## ～第2回後編～

前月号に続き、令和2年1月に開催した第660回建設技術講習会（徳島県徳島市）において、国土交通省四国地方整備局、徳島県、徳島市の若手職員と先輩職員計6名をパネリストとして行われたパネルディスカッションについて掲載します。

大石 話題が変わりますが、10年、15年選手になり、いろいろ成長してきておられるなという気はするのですが、改めて諸先輩から見て、これからの若手に期待したいことはありますか。野本さん、大西さん、栗飯原さんが育ってきたような環境と比べると、今の若い人が苦勞しているのは、先が見えにくいとか、それこそ馬遼太郎の『坂の上の雲』ではありませんが、坂道を登っていけば新たな展望が開けるといようなことをあまり感じていない、感じるができないからだと思います。これから、この世界に入ってくる人はもっとそう思うかもしれません。

それでは日本国は沈んでいくだけですから、そうではなくて、若い皆様はこういう点に注意して

頑張っしてほしいとか、これだけは気をつけろよというような点がいくつかあると思います。改めて、何かアドバイスなり注意事項などをおっしゃっていただくとありがたいです。

### もっとメディアを活用して いくべき

野本 今日のパネルディスカッションのテーマ、「新しい時代における公務員技術者の使命」ということで、今から先、新しいものをつくるのが花形だった時代から、どんどん維持管理の時代に移っていきますが、維持管理の仕事に光が当たっていません。ちょっと地味なので、言い方は悪いので

### パネリスト

中村 伸輔	国土交通省 四国地方整備局 徳島河川国道事務所 河川調査課 計画係長
池上 奈々恵	徳島県 県土整備部 高規格道路課 主任主事
美木 弘充	徳島市 土木部 下水道事務所 保全課 技師
野本 粹浩	国土交通省 四国地方整備局 統括防災官
大西 孝司	徳島県 西部総合県民局 県土整備部 副部長
栗飯原 史朗	徳島市 下水道事務所 建設課 課長
司会 大石 久和	(一社) 全日本建設技術協会 会長

すが、人気がない。だけど、皆様がこれからやっていく仕事の中で維持管理という仕事がどんどん大きくなっていくと思います。

これからの方々が、この維持管理の仕方について、更新も含めて、どのような立ち居振る舞いをしていくのか。われわれはずっとものをつくり続けてきたのですが、気になっているというか、そこが一つの新しい時代なのかなというような気がしています。

**大石** アドバイスというよりは、時代認識を語っていただきました。大西さんお願いします。

**大西** 次の世代にお願いしたいことが2つあります。

まず一つは、先ほども言ったのですが、人と人とのつながりを大切にしてほしいということです。われわれ、技術職というのは、一つの現場という単位で言うと、個人プレー的なところがあるのですが、実は組織一体となってスクラムを組んでいかないと、なかなか地域住民のためには対応していけないところがあります。つながりを大切に、みんなで一緒にやっていってほしいと思います。

もう一つの大きな課題として、コンサルタントとか建設業の方の話を見ると、人手不足があると思います。確かに公務員の場合は、定員割れするようなことはないのですが、民間企業の場合、「土木」というだけで毛嫌いされて、なかなか人が来てくれない。やはり公務員技術者というのは、民間のコンサルタント、測量会社、建設業の方々がいてこそ成り立っているのです、その民間企業に人手不足が生じるというのは非常に大きな問題だと思います。

せ•っ•か•く•各•業•界•毎•に•協•会•と•い•う•ま•と•ま•り•が•あ•る•の•で•す•か•ら、一体となって、お金を出し合い、例えば魅力あるドラマづくりをしてもよいのではないのでしょうか。以前、青函トンネルをつくるとき『海峡』という映画を見たことがあって、土木の技術者っていいなというイメージを持ちました。メディアの力というのはものすごく強いので、もっと活用すべきだと思います。数年前に普通高校の方を対象に「土木職」についてのアンケートを取ったことがあって、その結果で思ったことは、土木のことって意外に知られていないのです。どんな

仕事をしているのか、給料体系がどうなっているのかということも全然知られていなくて、簡単にそのことを説明しただけで「やってみたい」という人が結構いました。

基本的にPR不足だと思いますので、これからの世代の方々には、PRしていく手法を考えていただきたいと思います。

先ほど女性の入職者が増えたというお話がありましたが、将来的には男女の比率が半々ぐらいになったらいいなと思います。そういう課題解決に向けて研究、努力をしていただけたらと思います。

**大石** ありがとうございます。栗飯原さんお願いします。

**栗飯原** 私が若い頃は、何もない状態でもものをつくっていく時代でした。これからの若い人たちは、今あるものをやりかえていく時代ではないかと思います。

当然、モノですから、いづれやりかえなければいけないときが来るであろうと思います。それをいかに長持ちさせるか、また、やりかえるにしても、今あるものをどうやってやりかえるかを考える時代、そういう技術、知識を向上させることが必要だと思っています。

**大石** ありがとうございます。財政が厳しいということが、われわれ、国民全体にすり込まれていると言っていると思います。われわれは、それがものすごくすり込まれているので、もう新規の公共事業はできないと思込んでいます。だから、わが国だけが公共事業費を下げ続けてきて、いつまで経ってもつながらないミッシングリンクの道路を負ったまま、経済が成長しないから、財政が厳しくなり、国債発行額が増えているという姿になっている。これは間違いで、われわれも、公のお金を使っている側ですから、このことについて正しい認識を持たなければいけません。

## 価値観の多様化

女性の話に戻すと、人類というか、日本人も女

性と男性が半々ですから、わが国の土木の世界も、やがて半々になってもらう、それがダイバーシティの向上につながる、こういう議論は多いのですが、アメリカは日本よりはるかに女性の登用が進んでいます。このことをアメリカの経済学者や経営者は「価値観の多様化」と言っています。ここが大事なことです。

女性でしか持てない価値観があります。男性として生まれてきたからには、絶対身につかない価値観がある。そういう価値観を持った人が、世の中の人口の半分を占めています。それを男性では代替できないという観点から、女性を登用することなのです。ダイバーシティを高めることが大事だからという、理念的な話はアメリカではしていません。女性でないと感じられない感受性があり、それを社会に実装していかなければならないから、女性の登用が進んでいるのです。

これは障害者の登用も同様で、障害者しか持たない感覚があります。例えばフランスの美術館では、障害者が描いた絵を専ら買いつけている美術館があります。名もなき障害者の方の中には、われわれ健常者よりも色彩感覚や造形感覚はるかに豊かな人がいます。日本では有名な画家が描いた絵だからといって何百万円で売りに出しますが、そういう人たちの作品に全然価値を見出していません。

今日は新しい時代における公務員技術者像が全体のテーマになっていますので、若手技術者の皆様の気持ちをお聞きしたいと思います。

**中村** 私は土木職で入ったので、土木に関する知識と経験をひたすら積み、それを生かして仕事をこなしていくというのが土木の公務員の使命というか、そうあるべきだと今まで何となく思っていたの

ですが、今日、いろいろお話を聞いて、これからはどんどん土木以外のことにも関心を持ち、それを仕事に生かしていきたいと思います。また、男性と女性の価値観の違いというお話もありましたが、自分が持っていない、自分と違う職業の方の考え方を取り入れることによって、仕事に生かされることがあるのではないかということを感じました。

**大石** もちろんわれわれは土木技術者ですから、それを基礎として、コンクリートを使ったり、鉄を使ったりすることだけがわれわれの世界ではなくて、新しい材料やコミュニケーション技術が入ってきたりすることに対して貪欲でありたいですね。池上さんはいかがですか。

**池上** 大石会長や先輩方の話を聞いて、やはり時代は変わってきていると感じました。新しい技術も入ってきていますし、求められるものというのも、昔と比べて変わっているところがあると思います。

そこにやはり柔軟な感覚を持つということが非常に大事だと思っていて、常に新しいことにチャレンジしていく気持ちは持っておきたいし、そういうアンテナを張っておきたいと思っています。

私のモットーは、食わず嫌いならぬ、やらず嫌いはやめようということ。失敗したら、自分はすごく大変な思いをするかもしれないし、周りの人に迷惑をかけてしまうかもしれませんが、やはり様々な分野に対してやる気を持って何でも取り組んでみる、興味を持ってみる。そういう気持ちをもってこれからも頑張っていきたいと思います。

**大石** そうですね、素晴らしいことをおっしゃっていただきました。関係のないことなんて何もないのです。全てつながっておりますので、それは私には関係ないよと言った瞬間、私はその人の成



長は止まると思います。あるいは、私はそのことに興味がないよという、その世界を縮めれば縮めるほど、その人の世界は小さくなって、その人の人物も小さくなっていくように思いますね。美木さんはいかがですか。

**美木** 諸先輩方からのお話にもあったように、これからは維持管理の時代に移り変わっていくのかなと、それは私自身も強く思っております。近年、全国で多発している自然災害では、徳島でいいますと、近々起こり得る南海トラフ地震に備えて、いつも行っている調査・点検・維持管理業務を、力を入れてやっていかなければならないと思いました。

今現在、人口減少及び少子高齢化の傾向も強まってきており、今後、財政状況も厳しくなっていくと思いますが、限られた予算の中で優先度を設けて業務を進めていくのが、われわれの今後の仕事になってくるのではないかと思います。

## 時代の変わり目を経験してきた先輩から若手技術者へのメッセージ

**大石** ありがとうございます。新しい時代における公務員技術者ですが、今も話がありましたように、われわれを取り巻く環境は著しく変化してきています。予算の厳しい制約、そして住民を含む日本社会の著しい高齢化、私たちを引き継いでくれるべき若者の急速な減少、そして私たちがつくり上げてきた社会資本の急速な高齢化、あるいは老朽化が進んでいきます。新しく供給していくよ

りも、供給されたものが高齢化していく、あるいは傷んでいく、こういう時代に入ってきています。

一方で、それをサポートするための技術もいろいろ進んでいて、例えば橋梁で言えば、ノイズがあった場合にどこが傷み始めたか、どこのサビが進んだかといったようなことがわかる技術が開発され、われわれの世界に入ろうとしています。

われわれもまた、どういう技術ニーズがあるのかということを外の世界、ITやAIの世界、材料学の世界に多数発信することによって、われわれの世界に持ち込んでこなければならぬ、そうでなければ住民に対するサービスが十分にできない、そういう時代が来ようとしています。

また少子社会ですから、女性の皆様方にも、今以上に、もっとわれわれの世界に入っていて活躍していただかなければなりません。そのためには現場のあり方や仕事のあり方を含めて、われわれが変わっていかなければならない点が極めて多く含まれていると思います。

そういう時代の変化は、もちろん過去にもありました。そうした過去の変化に比べ、これから起こる変化は、おそらく過去に経験しなかったほどの大きな変化だと思います。われわれ、土木技術者がそれを乗り越え、多くの国民の負託に応えていけるかどうかは、ここにいる、あるいは全国の全建会員のこれからの努力にかかっていると思います。

そういう大きな時代の変り目を経験してこられた諸先輩から、ぜひ若い技術者に送るメッセージをいただきたいと思います。栗飯原さんからお願いします。

**栗飯原** 今、若い世代の人たちというのは、私た



ちが生きてきた世代とはまた違ったことを考えていかなければならないだろうと思います。今は若手の人も将来は先輩職員になっていくでしょうから、そのときに、若い職員にアドバイスが送れるような経験をしてほしいなと思っています。

**大石** それは、自ら経験し、自ら挑戦しろ、こんな意味にもなりますね。大西さん、お願いします。

**大西** 僕らのときと比べ、今、土木に入ってくる方は非常に優秀だと思います。もしかしたら、その優秀な芽を摘んでいるのは、失敗を恐れたり、今からやることの先を自分の常識で駄目だと判断してしまう、僕ら先輩なのかもしれません。

これからの若い方をお願いするのは、やはり挑戦することです。今、新しい技術がどんどん入ってきていますので、先ほど「貪欲」という言葉がありました。貪欲にどんどん吸収し、いろいろなことをやってみたりしてもらおうということが大切かと思います。

特に、この会場には、管理職の方々もいらっしゃると思うのですが、われわれがしなければならないのは、挑戦する機会をつくってあげることだと思います。いろいろなことをしても、せっかくやる気になってきても、それを管理職の方で芽を摘んでしまうと新しい技術は伸びません。それはわれわれと若者とが一緒になってやっていかなければならない課題じゃないかと思っています。失敗を恐れずにやっていただけるような環境づくりをしていかなければならないと思いました。

**大石** そうですね。そのためには柔軟な姿勢での先輩たちの応援が絶対必要ですね。よろしくお願いします。野本さんお願いします。

**野本** 国土交通省で土木の仕事をしていると、設計の段階だけやったとか、工事を発注するだけとか、監督だけとか、あまり全体を通して見ることができません。私は、自分が携わってきた仕事は一生懸命やってきたつもりですので、自分の中では、自分がつくったと思って仕事をしてきました。

自分の心の中に自分がつくったという碑を建て、その現場をまた見に行くことで、ものをつくることに愛を持ってやるということがすごく大事

だと思っています。やはりその場所で、そのポジションで、本当に一生懸命やることによって、初めて自分の中に碑を建てられるのではないかと、そこを自分で達成感にしてやっていただけたら、これからどんどんいい仕事ができるのではないかと思います。

**大石** ありがとうございます。それが野本さんを支えてきたものになっているのです。さて、最後に若手の皆様方から、今までいろいろなこととお聞きいただいた上での感想、決意、これからの自分の思いでもいいので、何か語っていただけて締めたいと思います。美木さんお願いします。

**美木** 先ほど、大西さんから少し発言があったのですが、今、土木職員は人手不足で、市の土木職員の募集も実は定員割れしております。私は、若手職員の人材を確保するために、土木業界のイメージチェンジを進められたらいいのではないかと思います。

建設業の就労者数は20年前と比べて200万人くらい少なくなったと言われており、やはり土木業界は若者離れが進んでいるのではないかと思います。一般的に建設業に対するイメージというのはあまり良くなって、「3K」、いわゆるきつい、汚い、危険という悪いイメージがどうしてもついてしまっており、なおかつ休みも少ないということで、できる限りイメージを変えていくことが重要です。例えば、ゆとりある工期の設定、休日確保したらそれを適正に評価するなど、行政としてサポートできるような何かをしていかなければならないのではないかと、今回のお話で思いました。

**大石** ありがとうございます。それでは池上さんお願いします。

**池上** 今回のパネルディスカッションのお話をいただく前に、先輩から、「将来、どんな徳島にしていきたいと思うのか」と聞かれたことがありました。そのとき、私は即答できませんでした。今、目の前にあることだけをこなしていた自分に気づかされたときでもありました。

今日のテーマでもある公務員の使命感というところで皆様から、特に先輩方からお話いただいた、



メディアの活用であったり、技術職員が減っていく中で新しい時代に即してやっていくということ。新しい時代に突入している中で、今後自分が技術者として何ができるか考え、そして、将来を見据えた形で仕事に取り組んでいくといった意識を高めること。これを継続させていきたいと思いました。

最後、感想になりますが、今日のパネルディスカッションは、改めて自分のことを見つめ直すいい機会となり、非常に感謝しています。ありがとうございました。

**大石** ありがとうございました。それでは中村さんお願いします。

**中村** 今日参加させていただいた感想ですが、今は事務所の係長という立場もあり、日々、資料作成など、事務的な作業にも追われ、本当に毎日をこなしていくのが精いっぱい、入ったときのような仕事に対する希望というのが少し失われつつあって、生活のためにやっているみたいところが大きくなってきたのかなと思っていたところです。今回、パネルディスカッションに参加させていただいて、改めて公務員技術者の使命ということで、先輩方からのアドバイスや意見をいただき、今後、単に仕事をこなしていくだけではなく公務員技術者として、仕事の中にやりがいを見つけ、モチベーションを高めながらやっていかないと改めて感じました。

**大石** いいパネルディスカッションになりましたね。公務員技術者に課せられた使命は、これからますます大きくなっていくと思います。話題にも出たように、地球、あるいは気象の凶暴化が起り始めており、災害はますます厳しくなります。洪水、豪雨などが増え続けると同時に、わが国は既に地震の多発期に入っているという説もありま

す。近い将来に大規模な地震が首都圏や東海・南海を襲うと言われています。

一方で、人口が減っていく中でわが国の生産能力を維持し、GDPを維持していくためには、一人当たりの労働生産性が高まらなければなりません。そのためには、今まで以上に効率的な移動ができる、そういう環境が必要です。道路にしても、鉄道にしても、そういった工夫がますます求められる時代が来ていて、それこそ土木技術者の出番が来ていると言っていると思います。

世界的に見ても、2018年のトランプ大統領の一般教書演説では、「近代的なインフラがアメリカには必要だ。アメリカ国民はそれを求める権利がある」、こういうことを高々と言われました。そのためには、1兆5,000億ドルの投資が必要で、これは100円で見ても150兆円で、それだけの投資をやると言いました。

あの財政出動に慎重だったドイツも、ドイツ経済のためには財政出動しかないのではないかといった議論が起り始めています。土木技術者やわれわれ公務員技術者に対する期待が潜在的に深まっていて、やがてこれは日本でも顕在化していくように思います。

若手の皆様には、今日のパネルディスカッションを通じて自信を深め、自己研鑽に励んでいただきたいし、お聞きになった会場の皆様方にも、それぞれのポジションにおいて、何か参考になることがあったのではないかと思いますし、そのように期待したいと思います。

長時間お付き合いいただきまして、ありがとうございました。

【収録日】令和2年1月22日(水)

【開催場所】あわぎんホール(徳島県徳島市)